



せん状地^{じょうち}で、川^{かわ}の水^{みず}がなくなる^{ところ} 所^{ところ}がある^{ところ}のはどうして

せん状地^{じょうち}は「おうぎ^{がた}」形^{がた}をした^{へい}平野^や

川^{かわ}が山地^{さんち}を流^{なが}れているときは、川底^{かわぞこ}のかたむき^{おお}が大きい^{かわ}ので、川^{かわ}の流^{なが}れが速^{はや}く、川岸^{かわぎし}や川底^{かわぞこ}をけずりながら流^{なが}れ、けずり^{はこ}とったもの^{はこ}を運^{はこ}んでい^{はこ}きます。

ところが、川^{かわ}が山地^{さんち}から平野^{へい}に流^{なが}れ出^だす所^{ところ}にくると、川底^{かわぞこ}のかたむき^{きゆう}が急^{ちい}に小^{ちい}さくなるので、流^{なが}れがゆるやか^{かわぞこ}になり、川底^{かわぞこ}に土砂^{どしゃ}や小石^{こいし}など^つを積^つもらせ^つます。このようになると川^{かわ}の流^{なが}れがさまたげられ、川^{かわ}は、別^{べつ}のほうへ流^{なが}れを変^かえてい^かきます。

このようなことが何^{なん}度もくり返^{かえ}されると、山地^{さんち}と平地^{へい}の境目^{さかいめ}あたりから、何^{なん}本^{ほん}もの流^{なが}れができて、運^{はこ}ばれてきた土砂^{どしゃ}や小石^{こいし}など^つが積^つもり、全体^{ぜんたい}として、「おうぎ^{ひろ}」を広^かげた形^{かたち}の平野^{へい}ができます。これを、せん状地^{じょうち}とい^いいます。

川^{かわ}の水^{みず}が地下^{ちか}にもぐ^る

せん状地^{じょうち}は、長^{なが}い年^{ねん}月^{げつ}をかけてできた^なものです。せん状地^{じょうち}の真^まん^{なか}中^{なか}あたりでは、土砂^{どしゃ}や石^{いし}などが厚^{あつ}く積^つもっています。このために、このあたりでは、川^{かわ}の水^{みず}は地下^{ちか}にもぐ^るてしま^いいます。そして、せん状地^{じょうち}のはし^{ところ}の所^{ちか}に、地下^{ちか}をもぐ^るて流^{なが}れていた水^{みず}が、泉^{いずみ}にな^りてわき出^でてき^ます。

せん状地^{じょうち}の始^{はじ}まりや、はし^{ほう}の方^{かわ}では、川^{かわ}にた^{なが}くさん^{なが}の水^{みず}が流^{なが}れてい^ますが、真^まん^{なか}中^{なか}あたりでは、水^{みず}は地下^{ちか}にもぐ^るり、水^{みず}が少^{すく}ない地^ち域^{いき}にな^りてい^ます。(監修・国司 真)

